

島民星空ガイドによる神津島まるごとプラネタリウム ～ガイド育成&「星空保護区」認定の取組～ (神津島村役場、NPO 法人神津島観光協会)



神津島の星空



島民星空ガイドの Full Earth 古谷さん

1. 背景

「まるごとプラネタリウム～東京の島で星空さんぽ～」という印象的なフレーズで島の魅力を訴求する東京都・神津島村。令和2年12月に都内で初、日本で2番目に「星空保護区」として国際ダークスカイ協会（以下、「IDA」。）に認定された。「星空保護区」は、光害の影響がない、暗く美しい夜空を保護・保存するための優れた取組を国際的に認定する制度で、神津島の星空はまるで天然のプラネタリウムのように美しい。

本取組をベストプラクティスとして取り上げるのは、地域が自分たちにとって「当たり前のこと」も外から見れば「当たり前ではない」価値あるものであることに気づき、その価値を守り・高めるプロセスが、他地域における新たな価値発掘・磨き上げの参考になると考えるからである。

【神津島村】人口：1873人（令和3年10月1日現在）

都心から南や約180kmに位置し、富士箱根伊豆国立公園として指定。

周囲約22km、面積約19km²の東京の離島。

【星空保護区】申請主体：神津島村 認定範囲：神津島全域

2. 大学生インターンがきっかけで始まった神津島の星空活用

平成28年の夏、NPO 法人神津島観光協会が（公財）東京観光財団の学生インターン事業※を活用し、大学1年生だったハルカさんを学生インターンとして迎え入れた。初めて神津島を訪れたハルカさんにとって、約1ヶ月間の濃密な時間はあっという間に過ぎ、学生インターンの成果報告会が観光協会役員・職員の前で行われた。「神津島の星空はまるで『まるごとプラネタリウム』のような美しさだった。今後星空を観光に取り入れるとよいのではないか」。ハルカさんの提案や活動に観光協会役員・職員の心が動かされた。これまで多くの島民が星空の美しさを当たり前の日常だと思い、星空が好きでも写真撮影など個人の趣味の範囲に留まっていた。「星空を観光する」という視点が斬新だったのだ。

※【学生インターン事業】※令和3年度は未実施

東京観光財団が、都内観光協会等に都内の大学生・専門学校生を派遣。学生の視点や感性による着想を事業運営に活用するとともに、地域活性の新たな担い手の育成が目的。

3. 「星空の観光」実現へ島民星空ガイドの育成

観光協会は星空を活かすべく島民星空ガイドの育成に着手した。平成28・30年度の2年間にわたり星空の専門家を講師として招聘してガイド育成講座を開催した。主婦・民宿経営者・飲食店経営者・地域おこし協力隊員など多様な人材が集まり、島の星空文化・特徴等について学んだ。18名の島民星空ガイドが誕生し、約30回の星空観賞会を開催してきた。

ほとんどのガイドは兼業である。星空ガイド専業で生計を立てるのは容易ではないという課題があったため、別の本業を持つ島民を巻き込んだ形でのガイド育成が始まった。一方で、本業との兼ね合いで継続的かつ安定的なガイド確保は難航した。現在、兼業ガイドとして活動できるのは5人前後である。それでも『お手伝いならできます』とってくれる人もいるし、講座を通して島民が星空の理解を深める機会は拡大している」と観光協会・覺正事務局長は話す。

神津島のネイチャーガイドである Full Earth・古谷さんは、「星空保護区」の中でも世界的に有名なニュージーランド・テカポ村でのガイド経験を経て平成30年に神津島へ移住した。「本業をもった島民の兼業ガイドが増えていけば珍しい取り組みになっていく」と話す。また、覺正事務局長は「各島民ガイドの生活に根付いた考え方や星空への思いに個性が現れるのが特徴だ」と島民星空ガイドの魅力を話す。

4. 星空保護区の申請へ

島民星空ガイド育成が始まって3年後の令和元年8月、「星空保護区」への取組は急激に進みだした。神津島村長がIDA東京支部のメンバーと会う機会があり、「星空保護区」の存在を知ったことがきっかけであった。神津島村役場・小川産業観光課長は、「夏季以外は観光客が少なく、閑散期対策が数十年来の課題だった。当たり前だと思っていた星空が国際ブランドになれば通年でアピールできる島の看板になると思った」と話す。IDAは米国アリゾナ州に本部を置く国際団体で、全世界150箇所以上の星空保護区を認定している。村役場は認定に向け、主に以下の条件をクリアしなければならなかった。

▼「星空保護区（ダークスカイパーク）」認定の主な条件

- ①夜空が暗いこと（21.2mag/arcsec以上の暗さ）
- ②公的な屋外照明が光害対策の基準（上方光束0%、色温度3000K以下）をクリアしていること（屋外照明の光が夜空上方に漏れない等）
- ③地域住民の理解・賛同
- ④光害に関する教育プログラムやイベント、ツアーが定期的に行われていること

特に困難だったのは②の対策である。まず、夜空の暗さや照明の規格を認定基準に合わせ

るため、島内全ての街灯を取り替える必要があった。令和2年1月、照明器具等を専門とする岩崎電気株式会社の協力を得て足元は明るく・夜空は暗い星空に優しい照明のサンプルが完成した。

次に取り掛かったのは島民の理解を得ることだ。島内全ての街灯を取り替えることで、夜道を心配する島民が出てくるかもしれないと村役場は懸念していた。**村役場は、令和2年1月に島民向け説明会を行い、録画映像を村営テレビでも放映した。こうした活動を通して無事、島民からの理解を得られた。**住民が納得したポイントは「もし不安を感じる事があれば街灯の数を増やせる」ことだった。星空に優しい照明により、数を増やしても夜空の暗さへの影響は少なかったからだ。令和2年12月時点で、島内の2/3の街灯が取り替えられたが、島民からはクレームは寄せられていないという。これにより夜空の暗さも無事認定基準をクリアすることができた。

5. 神津島「星空保護区」のこれから

星空保護区に認定された後、新型コロナウイルス感染症拡大の影響等で観光客向け星空観賞会の開催は十分にできていない。しかし、島民の星空活用への理解は深まっている。島の小学校から役場に「小学生版星空ガイドをしてみたい」という申し出があったという。感染症が落ち着けば、年内には島民小学生ガイドによる星空観賞会が実現するかもしれない。

今後の展望を小川産業観光課長は次のように話す。「星空が観光資源になることで、夏季を含めて1年に2回来て頂ける島になっていきたい。例えば、秋や冬の月食時期に島の民宿全体を会場として、多様な島民星空ガイドと一緒に過ごす、『島まるごと星空観賞プラン』があってもいい。いつも素晴らしい星空が見えるのだから」。

<おわりに>

地域資源を活かすためには、地域の「中の人」と「外の人」の絶妙なバランスが大切だと感じました。島で生まれ育ったご年配の方は「綺麗な星空は当たり前」と仰っていました。その「当たり前」が「当たり前じゃない」と気づいたのは、神津島に初めて訪れた大学生です。大学生の提案を受け入れ最初に島民ガイド育成を事業化した観光協会職員も島外からの移住者です。「外の人」の行動が、「中の人」である役場・島民を巻き込んで大きなうねりとなりつつあります。

【取材協力先】	神津島村産業観光課 課長 小川 徳柱様 NPO 法人神津島観光協会 覺正 恒彦様、柏木 紗理子様 Full Earth 古谷 巨様
【取材日時】	令和3年7月29日～30日
【関連リンク】	https://kozushima.com/star/ (神津島まるごとプラネタリウム)

(地域振興部事業課 池山)